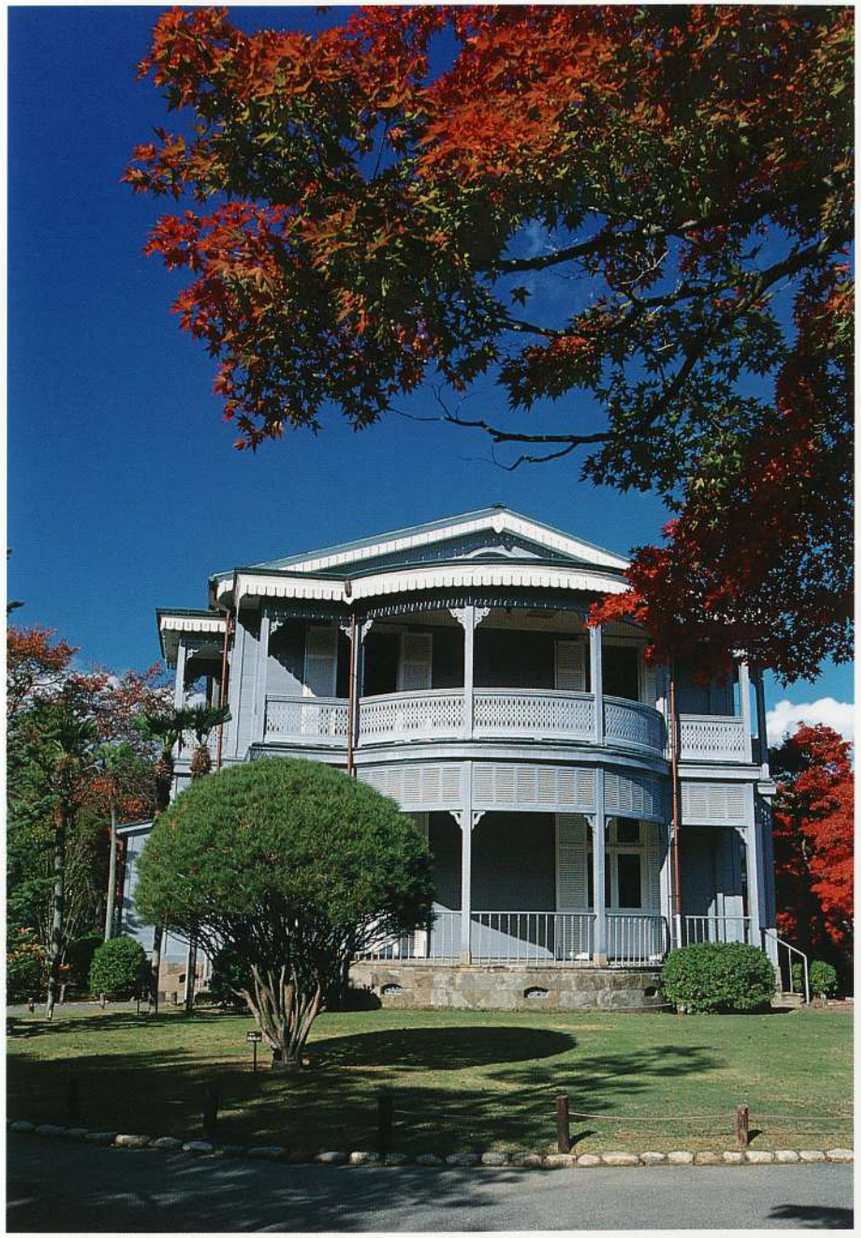
明治村だより

1995 Autumn



創刊号
Vol.1

平成七年十月一日発行（季刊）

染色・葉脈のしおり作り教室

明治村の中の樹木を使って布を染めたり、葉を使ってしおりを作ります。

参加費／染色五〇〇円、しおり作り二〇〇円

10月8日(日)、22日(日)、11月5日(日)、19日(日)
千早赤阪小学校講堂

機織り実演

明治時代の機を使って、布を織ります。

毎週土曜日　鉄道寮新橋工場・機械館

クイズラリー

明治村に関するクイズを解きながら、明治村をまわります。　参加費／二〇〇円

11月23日までの第2・4土曜・日曜・祝日
9時30分～閉村15分前

呈茶　料金／五〇〇円

11月23日までの日曜・祝日
11時～16時(10月)、11時～15時(11月)
西園寺公望別邸「坐漁荘」(10月)
茶室「亦楽菴」(11月)

人力車体験乗車

明治時代のタクシー・人力車の乗り心地を体験できます。　料金／三〇〇円

毎週日曜日　京都七條巡査派出所前広場

明治村の冬催事（予定）

ね年郷土玩具展
12月23日～平成8年2月12日
三重県庁舎二階特別展示室

クリスマスイベント
12月2日～12月25日

クリスマスコンサート
12月10、16、17、23、24、25日
聖ザビエル天主堂

お正月イベント
1月1日～3日

『明治村だより』
第二号（平成七年冬）発行のお知らせ

発行時期　本年十二月（予定）
申込方法　『明治村だより』第二号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料一九〇円分の切手とともに封書にてお申し込み下さい。

目次

創刊のごあいさつ　村松貞次郎 ・・・・ 2
特別展「明治をよむ　明治をみる」 ・・・・・・ 3
明治をよむ　明治をたべる　竪山　翠 ・・・・・・ 6
明治村の鉄道施設
六郷川鉄橋　西尾雅敏 ・・・・・・ 9
鉄道寮新橋工場・機械館と鉄道局新橋工場
中浜寿治 ・・・・・・ 13
秋の明治村 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

〈表紙写真・渡辺学〉

平成七年十月一日発行
『明治村だより』第一号（平成七年秋）
発行　博物館明治村
愛知県犬山市大字内山一番地
電話(〇五六八)六七―〇三一四　〒四八四
東京事務所
東京都千代田区紀尾井町三―一三
文藝春秋ビル九階
電話(〇三)三二六三―五五六六　〒一〇二
製作　求龍堂

創刊のごあいさつ

博物館明治村館長　村松貞次郎

博物館明治村は昭和四十年（一九六五年）に開館しましたので、この平成七年でちょうど開館三十周年になります。

その博物館明治村は、明治文化全般にわたる学術研究の成果や、博物館活動の情報をお伝えする月刊の広報誌として、昭和四十五年一月に『明治村通信』を創刊致しました。寄稿者や読者の皆さまのご協力と、関係者の努力のお蔭で順調に刊行を続け、本年八月で三〇〇号を数えるに至り、高い評価をいただいて参りました。それは大きな成果と自負し、また感謝申し上げるところでありますが、この二十五年の間に時代も大きく変わりました。いたずらに、そこに安住するのもいかがかと思われるようにもなりました。

そこで、開館三十周年の大きな節目の年を期して、その体裁・内容を一新した『明治村だより』を創刊し、これまでの『明治村通信』に代えて、さらに広く頒布することに致しました。もちろん博物館の紀要としての内容は十分に維持しながらも、明るく楽しく平易な、新しい時代の博物館広報誌として、より多くの方がたに読みかつ見ていただくことを目的にしたものです。

皆さまのより一層の御指導・御協力をいただきながら、館員一同、心を合わせて編集・発行を続けますので、どうか倍旧のご愛読を、とお願い申し上げて創刊のごあいさつとさせていただきます。

博物館明治村開村三十周年記念特別展

明治をよむ　明治をみる

―文学に描かれた風景―

11月26日まで　三重県庁舎一階特別展示室
初版本、衣食住に関する資料約八十点を展示するほか、文学作品に登場する味覚を追体験するセミナーや明治時代の料理書に基づいたカレー、ワッフルの販売も行います。

今回の展覧会では明治の文学特に小説における風俗描写を中心に選んで其の場面に関係の深い生活資料を対比させることを試みました。

明治の住空間・ファッション・味覚・風景という四つのテーマのもとに、文明開化という歴史的な変革の中で人と文学の深い結びつきを考えることを主眼とし、そこにあらわれた人々の生活を探りたいと思います。ここにその概要と展示品の一部をご紹介します。

「文学」ということば

「文学」ということばは、古来中国から伝来したもので、書を読んで研究する学芸すなわち歴史・詩文など全般をさし、のちに転じて学芸を司る教師及び儒官そのものを称することばでした。幕末期の英華辞書にliteratureの訳語として現在のような意味の文学が使われ、急速な西欧文化の移入にさいし新しい言葉の必要性に迫られたわが国でもこの用法を取り入れました。

明治の文学の特徴

明治の文学の大きな特徴はまずその文体が言文一致体という口語体であるということです。それまでは漢文混じりの訓読体が主流を占めていました。

明治初期は仮名垣魯文らが登場してやや江戸期の戯作調の雰囲気を遺しながら開化期の流行風俗を滑稽に描きだした様々な作品を発表しました。明治中期にはまず坪内逍遥、二葉亭四迷らがわが国近代文学史上特筆すべき活躍をして、今まで卑俗なものとされてきた小説を芸術の地位にまで高めようと努力した結果、文学者という存在を世に知らしめました。ついで此の流れの中で逍遥らの影響を多分に受け尾崎紅葉らが硯友社を組織して写実的な自然主義文学の端緒を開きました。同時代に森鷗外がおり、独自の美学で理想主義的な作品を多く著しました。明治後期には島崎藤村、田山花袋らが登場、当時の不安な世相を反映して個人の内部を深く探りだす描写をもって後の大正期において全盛となる私小説への橋渡しとなる作品を著しました。

いずれの時代の作品にも当時の流行風俗、世相などが如実に描写されていて、その中の幾つかをとりだしてみても明治という時代の一端をかいま見ることが出来ます。

明治の住空間

明治のすまいについては急激な洋風化はあまり見られませんが、従来の家屋の中に洋風の部屋をしつらえて応接間として使用することが普及しました。また生活を営む上で洋風の様々な便利な道具が取り入れられました。照明具などもその一つで、それまでの薄暗い蝋燭の火から明るいランプへと変わりました。

「～間毎の天井に白銅鍍金の空気ランプを点したれば、辺りは真昼より明らかに、人顔も眩しきまでに輝き遍れり。」（尾崎紅葉「金色夜叉」より）

「～花模様の丸ボヤの洋燈の下で、隅ではあったが、皆と一つ食卓に対ひ、」（二葉亭四迷「平凡」より）

明治のファッション

開化期の風俗をよくあらわしているのはやはり明治の中頃までの作品に多く、特にその服装などの描写は詳しく書かれていますが、ときには新しい物好きの西洋かぶれであるとやや批判を込めて描かれています。まず男性のファッションを見てみます。

「黒羅紗の半『フロックコート』に同じ色の『チョッキ』、洋袴は何か乙な縞羅紗で、リウとした衣裳附、」（二葉亭四迷「浮雲」より）

「『～それだから此の通り先日僕が白木屋へ注文したフロックコートを着ているのさ』と注意する。成程フロックコートを着ている。フロックコートは着ているがすこしもからだに合わない。袖が長すぎて、襟がおっ開いて、背中へ池が出来て、脇の下が釣るし上がっている。いくら不格好に作ろうと言ったって、こうまで念を入れて形を崩す訳には行かないだろう。」（夏目漱石「吾輩は猫である」より）

フロックコートは官吏の制服として明治の初めから取り入れられ礼服としてかなり普及したものです。色は黒が多く、ズボンは同布かまたは縞、チョッキも上着と共布で大きな襟が付いていました。上着はダブルとシングルがあり、丈は通常膝までありましたが、半フロックコートのように徐々に丈が短くなって現在の背広のようなかたちになりました。

「～白縮緬の兵児帯に巻き付けた金鎖を外して、両蓋の金時計を出して見せた。」（夏目漱石「門」より）

「～彼は黒樗文絹の帯の間を捜りて金側時計を取り出し、手早く収めつつ、」（尾崎紅葉「金色夜叉」より）

「～くるしいさんだんにてもとめたる袖時計のやすものをえりからはづして、ときどきときを見るはそっちのけ、じつはほかのものへ見せかけなり。」（仮名垣魯文「安愚楽鍋」より）

ハイカラな小物として懐中時計がもてはやされました。和服の場合は帯の間やふところに、洋服の時はチョッキのポケットに入れて携帯しました。明治初期から次第に流行し、明治中期に腕時計が登場するまでは時代の最先端をあらわすものとしてお洒落な人々に愛用されていました。

次に女性の衣裳ですが、一般的にはまだほとんど和服を着用していた時代です。洋装は一部の上流階級でのみ着用されていました。

しかし女子学生の風俗は時代の先端を行っており、文学作品にもその描写が多く見られます。

「鈴の音高く、見はれたのはすらりとした肩の滑り、デードン色の自転車に海老茶の袴、髪は結流しにして、白リボン清く、着物は矢絣の風通、袖長ければ風に靡いて、色美しく品高き十八九の令嬢である」（小杉天外「魔風恋風」より）

洋髪の髪型に流行のリボン、矢絣の着物に海老茶か紫の袴、編み上げの革靴といったスタイルが女学生の典型でした。また自転車は明治十年代にわが国にもたらされ、手軽な乗り物として重宝がられました。

明治の味覚

食生活に於いて特筆すべきことは西洋料理とりわけ肉食の普及があげられます。野禽や猪などの肉は昔からごく一部の人々によって食されてはいたのですが、一般的には仏教思想により長い間禁断とされてきました。幕末に横浜の居留地で外国人が牛肉を食べるのを見て日本人も食べるようになり、

「～士農工商老若男女。賢愚貧福おしなべて。牛鍋食はねば開化不進奴」と仮名垣魯文の「安愚楽鍋」に書かれているように文明開化の象徴とも言うべき現象となりました。

外国人であるならば牛肉をステーキにして食するのが通常ですが、肉を細かく切り、野菜とともに味噌あるいは醤油仕立てで鍋にして食べたということに明治人の工夫がみられます。

明治の風景

人々の娯楽として明治時代にも様々な催し物が開催されました。新政府が殖産興業の推進と啓蒙のために主催した内国勧業博覧会もその一つで回を重ねるたびに盛況を呈しました。

「～文明を刺激の袋の中に篩い寄せると博覧会になる。博覧会を鈍き夜の砂に漉せば燦たるイルミネーションになる。苟も生きてあらば、生きたる証拠を求めんが為にイルミネーションを見て、あっと驚かざるべからず。文明に麻痺したる文明の民は、あっと驚く時、始めて生きて居るなと気が付く。」（夏目漱石「虞美人草」より）

漱石の描いた博覧会は明治四十年三月から六月まで上野公園で開催された東京府勧業博覧会の情景で、多くの電灯が点火されて話題を呼びました。

同じくイルミネーションに飾られたものに花電車があります。明治三十七年、日露戦争の勝利を祝って東京電車鉄道会社が走らせたのが第一号でした。屋根に旗を飾り、電球で輪郭を縁取った華やかなものでした。

「車道の両側には一間置きに色電気を点けて、遠く見ると、丁度南京玉の紐を張り渡したやうな中を、五色のイルミネーションに包まれた花電車が、どれもどれも満員の札を掲げて誇然と通って居る。是も亦色電気で飾った各停留所の電柱の下には、其の満員の上へ更に乗り込もうとひしめく群衆、乗せまいと遮る車掌と車台の乗客、全で喧嘩のような騒の中を潜って、辛くのがるる如くに降りたのは欽哉と繁である。」（小栗風葉「青春」より）

以上さまざまな情景描写のなかの一部ですが、私達になじみ深い明治の文学作品も生活に密着した視点で捉えるとまた興味深い発見が読みとれると思います。

明治村の鉄道施設

現在、明治村では我が国の重要な交通分野での近代化遺産である六郷川鉄橋、鉄道寮新橋工場・機械館、鉄道局新橋工場の三件について移築工事報告書の作成を進めていますので、今回その概要をご紹介します。

六郷川鉄橋

博物館明治村犬山事務所　西尾雅敏

博物館明治村は、昭和六十三年四月、「六郷川鉄橋」の移築復原を終え一般に公開しました。昭和四十年に解体し保管していた物で、隅田川新大橋（鉄骨造）、天童眼鏡橋（石造）についで明治村では三番目の橋であり、日本近代化遺産の一つです。

この六郷川鉄橋は明治十年に創建され、わが国に現存する最古の鉄造鉄道橋として、橋梁技術史上、土木技術史上における価値は極めて高いものがあります。昭和六十三年は、国鉄の民営化と、本四連絡橋によって日本列島が全て鉄道で結ばれるという、歴史的な時でした。明治村は、その歴史的な年に、鉄道土木事業が明治以来のわが国の近代化に果たした役割の証言者として、六郷川鉄橋の復原をすることと決したのです。内外の資料によって判る限り、構造上許される限り、また技術上可能な限り、創建時の姿に復することを目的として工事を進めました。ここにその概要をお知らせします。

六郷川鉄橋について

明治五年、日本に初めて鉄道が敷かれた時、新橋と横浜の間の橋は全て木造でした。その後直ちに、複線化の計画に合わせて鉄橋への架け替えが計画され、明治十年この六郷川鉄橋が開通しました。英国人で当時の御雇い外国人ボイルの設計になり、英国リバプールのハミルトンズ・ウィンザー・アイアンワークス社で製作された部材で架構されました。長さ一〇〇フィートのワーレン・トラス桁六連と、四〇フィートの上路鈑桁二十四連で構成され、総延長約五〇〇メートルに及ぶ長大橋でした。当時既に関西では十三川などに鉄橋が架けられていましたが、それらは単線用であり、複線用としては六郷川鉄橋が日本最初のものでした。この橋は明治末年まで使われましたが、東海道線の複々線化に際して撤去、トラス桁は単線用に改造されて御殿場線の酒匂川に架け直されました。さらに五十年後の昭和四十年、酒匂川でも役目を終え、その時残っていた三連の内、一連は国鉄三島鉄道学園に単線のまま保存され、一連は博物館明治村に輸送されて保存され、昭和六十三年の復原となりました。

復原の方針

復原の形

単線用のまま組み立てるか、複線用に復するかが先ず第一の問題でしたが、出来る限り六郷川に架かっていた当時の姿に戻すべく、再び複線化することに決定しました。更に、酒匂川当時「左六十一度」で川に架かっていた橋を、やはり六郷川当時の「右七十五度」に戻すことになりました。

トラス復原上の問題点検討

トラスを復原するに当たって問題となった点は、次の三つでした。創建後既に百年を越えている部材が果たしてそのまま十分に体力を有しているのか。また、酒匂川鉄橋用に改造された時、追加或いは撤去された部分はあるのか、ないのか。それを旧状に戻した時、構造的な支障はあるか、ないか。

先ず当初材の素材について材質試験と強度試験を行いました。結果はSS41程度の引張強度はあるものの、曲げ強度と溶接施工性に問題ありというものでした。錬鉄であるため、溶接した場合内在している鉱さい部分で不慮の歪みを生じやすいのです。次に経年劣化については、日本国有鉄道編の「工事設計資料便覧」の考え方を準用して、明治三十年以前の材であるので、引張強度二割五分減、圧縮強度一割減、さらに表面の腐食劣化による強度減を、最大腐食厚三ミリとして強度減三割を見込むこととしました。許容応力の規準を決めた後、第二の問題について検討しました。当初材と後補材の区別は、取付のリベットの大きさが手掛かりとなりました。例えば、主構下弦材の上フランジ・プレートの補強板が二枚重ねとなっていましたが、他の部分より頭の大きなリベットで止め付けられており、当初材とは考えにくい取付状況であるため取り外すこととしました。

以上のような条件のもとで、果たして構造的に耐えうるか。構造計算の結果は良でした。復原後この橋に載るものは、単線分の軌道と蒸気機関車一両、反対車線を利用して設けられる歩道と見学者の重量です。それらのものを載せても十分に耐えうるものと判定されたのです。

橋台・橋脚の復原設計

旧材が残されていたトラスとは異なり、下部の橋台・橋脚の復原は難問でした。明治四十五年にこの六郷川鉄橋が新しい橋に架け替えられた時、橋脚も橋台も改造されました。改造当時の設計図も一部現存しますが、当初部分についての記載が十分でなかったため、その一例をもって復原することには疑問が残ります。また、その後の関東大震災後の被害調査図をもってしても結果は同様でした。しかし、隠れた資料の徹底的な調査の結果、信頼に足る資料が見つかりました。明治二十四年調べの「内務省所管官有財産目録」と明治三十年代に刊行されている「橋梁図」です。「橋梁図」の内容は「目録」に記された構造概要と合致し、さらに交通博物館所蔵の「六郷川鉄橋」の古写真の姿とも一致するものでした。以上の資料を基本として、復原設計は進展しました。

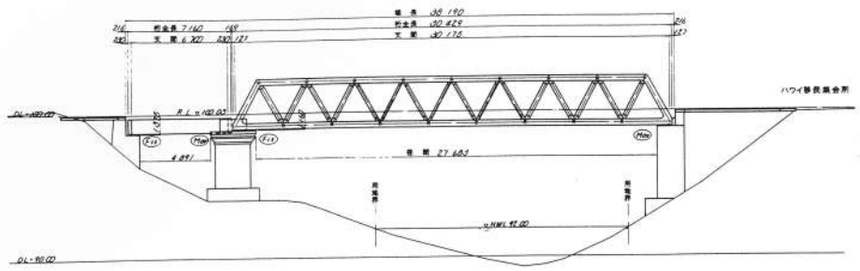
再建工事

再建位置の決定

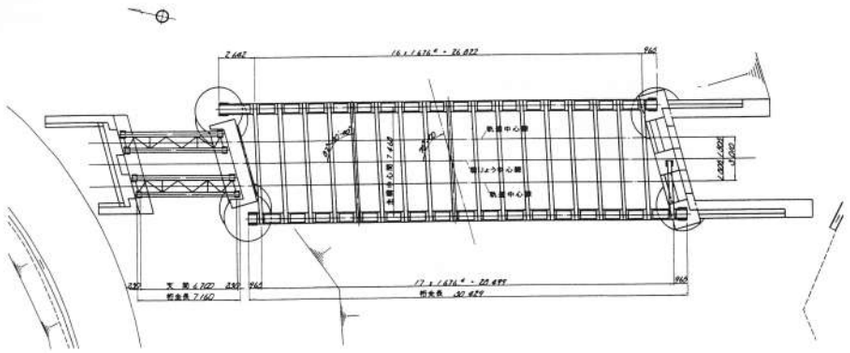
移築復原を実施するに当たり、技術的な問題と同様に重大な観点は再建場所の選定です。明治村は濃尾平野北辺の丘陵地にあり、東に位置する入鹿池から幾つもの入江が入り込んでいて、橋を架ける適地を、そのいずれかから選ぶこととなり、長さ三十メートル余りのこの橋は、村内中程、鉄道寮新橋工場前の入江に架けられることとなりました。橋下の空間を十分に確保し、橋脚・橋台の姿も一望のもとに納められるようにと、出来る限り入江の口に近く、谷の深い位置に架けることとなり、満水時には眼下に水面を見ることもできます。因みに、橋と相対する鉄道寮新橋工場は、六郷川鉄橋が作られた更に数年前の鉄道開業時、英国の同じ会社で製作され、建造された建物です。

主構

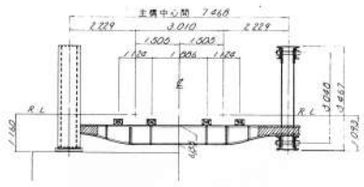
構造検討の結果に基づき、一部の例外を除いて後補材を撤去、主構を構成する各部材を復原していきました。その中で次のような処置を施した部材もあります。即ち、下弦材中央の部材だけ、二つに切断して解体されていたため、繋ぐ必要がありました。溶接信頼性に懸念が残るため、溶接で形を整える一方で、内面側から新しい板材をボルト(丸頭高力ボルト)止めして補強しました。なお、酒匂川改造時、米国カーネギー社の板材がウェッブ補強に使われていたことを付記しておきます。



側面図



平面図



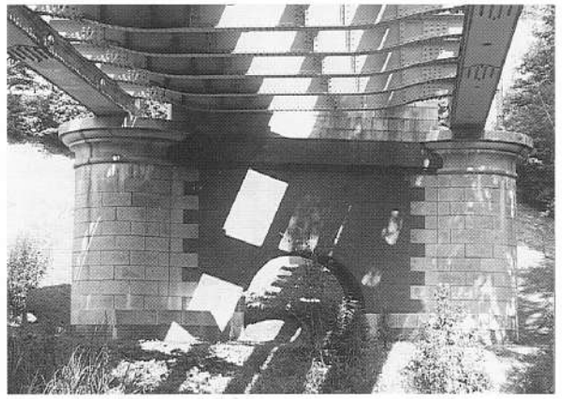
断面図(図中の斜線部が継ぎ足し部分)

横桁

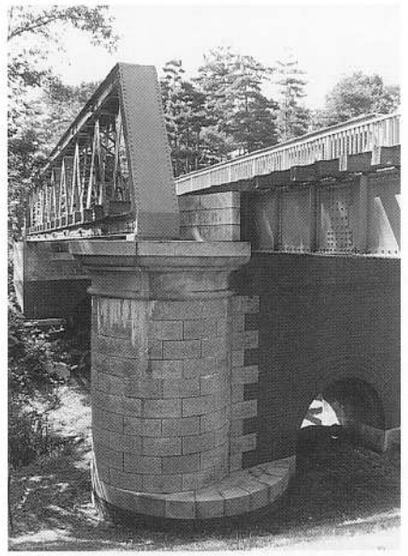
横桁についての最重要点は、複線用への再改造でした。酒匂川当時、横桁は上辺に盛り上がった弓形に改造されていましたが、史実によれば六郷川当時は下辺にふくらんだ弓形となっています。横桁両端をどのような大きさに作るかが問題でした。原設計者ボイルが英国土木学会に寄稿した報告記事を熟読した結果、横桁端部の高さは中央よりも一フィート小さいことが判明、それに従って端部への曲線を描いて弓形を想定してみると、主構下弦材への取り合いも形よく納まることが判りました。ついで、酒匂川当時各横桁間に渡されていた縦桁は、六郷川時代には無かった部材であるため取り除くこととしました。が、縦桁の接続に使われていたスティフナーは、横桁の腹にそのまま残しました。それは、スティフナーを撤去し、さらに撤去跡に生ずる無用のリベット穴を綺麗に処理することよりも、酒匂川時代の大きな改造の経過の痕跡として残す意義を選んだ結果です。

橋脚・橋台

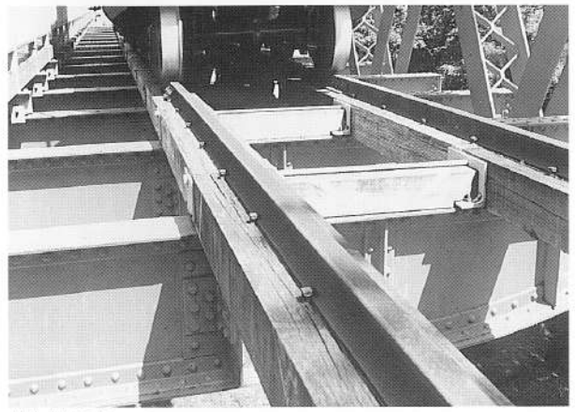
「橋梁図」を参考に復原設計図をおこし、レンガ・石による仕上げの区分も決定しました。更に「橋梁図」でも不明瞭であった橋脚頭部の繰り型については、ボイルの報告の記載文面に添って、「石造橋脚の形も鋳



橋脚南面と横桁



橋脚北面



縦枕木と平底レール

鉄橋脚の形と同様に」すべく、交通博物館所蔵の写真から描き起こすことができました。

施工は、コンクリートによる軀体を芯に、石材とレンガで仕上げる方法で進めました。岐阜県蛭川産の白御影石を切り出し、部位に応じて、ノミ切り、ビシャン、小叩きなどの仕上げを施しました。また、レンガは当時の寸法に近い大きさの物を特別に製作し、色も通常の赤レンガより濃い目に焼いて整えました。

軌道

「橋梁図」には軌道についての概要も描かれており、それによると、トラスの上については縦枕木、陸上部は横枕木仕様となっています。さらに、左右の縦枕木の軌間保持についての記載もあります。即ち、軌間保持材を渡して距離を保ち、緊結ボルトで離れを防ぐ方法です。しかし、枕木と横桁との締結方法については記載が無かったため、新しい工夫を施して止め付けました。ただし、今後新資料が発見された際、改良が支障なく実行できるよう、トラス本体、横桁本体の加工を避けました。なお、今回の使用レールは、鉄橋上においては明治末年頃の英国製平底三十キロ一種レール、陸上部は双頭レールです。

まとめ

現時点における最良の資料を駆使して、確認あるいは推定した歴史的事物。未だ全てが確定できた訳ではありません。何故なら、縦枕木の横桁への締結の仕組みがつまびらかではない。また、橋脚を挟んで仮に復原した上路鈑桁についても、当時の明確な姿が判然としない。それらについての信頼に足る新資料がでた時、改良し、より事実に近づけたいと望んでいます。

鉄道寮新橋工場・機械館と鉄道局新橋工場

博物館明治村東京事務所　中浜寿治

1　鉄道寮新橋工場・機械館

創立沿革

明治政府は、民部・大蔵省に鉄道掛を設置し、明治三年（一八七〇）三月鉄道建設に着手しました。英国人エドモンド・モレルを技師長として新橋～横浜間の測量を開始し、建設工事が行われました。明治五年二月、品川～横浜間の鉄道敷設が完了、七月には、新橋～品川間の工事が完了し、同年九月、明治天皇臨御のもとに開業式が行われました。この間、明治三年閏十月工部省が設置され、鉄道掛は工部省の所属となりました。そして、明治四年八月鉄道掛を鉄道寮に改めました。

鉄道敷設工事に伴い、各停車場の建設工事も行われ、明治五年三月十五日、横浜停車場の乗降場が完成し、五月三十日新橋停車場の乗降場が完成しました。

鉄道工場の建設も鉄道の開通とほぼ並行します。最初の工場は明治四年十月、新橋停車場構内に設けられ、敷地の東北辺りに工場建築の用地が当てられました。当初、新橋駅構内に建築された工場用建物は、明治五年七月に建てられた『機関車修復所』で、これが日本で最初の鉄道工場でした。この建物は、明治四年八月に来日した英国人フレデリック・コリール・クリスティーが計画し建築したものです。「鉄道寮事務簿第十四巻十号」の「新橋ステーション構内インシニール住居廻り水吐下水出来仕様書」（明治六年）に付けられている平面配置図（図1）には『汽車修復所』という名称の建物があり、この建物が『機関車修復所』です。

この建物は、「従東京新橋至横浜野毛浦　鉄道諸建築箇所分費用綱目」（明治五年）によると桁行一五〇尺、梁間三〇尺、二棟、明治五年二月着工、同年七月竣工、工費金六二一五両永五五文八分と記録されています。尺の単位が使われていますが、正しくは、呎（フィート）であったと考えられます。当時呎は日本でなじみがなく、寸法の近い尺で表現したのではないかと思われます。また、ここで二棟とあるのは、前述の「鉄道寮事務簿第十四巻十号」の図から判断して梁間三〇フィートの二スパンの意味であると考えられます。大島盈株の「鉄道日誌」によると、この建物は鉄構造であったことがわかります。堀越三郎は「日本建築士Vol・10」（昭和七年）で解説を加えてこの日誌を紹介しています。

明治十四年の「新橋停車場平面図」（図2）では、この建物が『器械場』に改称されています。鉄道開業当

図1　インシニール住居廻り下水図　明治6年
「鉄道寮事務簿第14巻10号」（交通博物館所蔵）

初、新橋停車場構内の配置は、中心から西側部分を東京馬車鉄道株式会社が使用し、北寄りに新橋停車場、東寄りに機関車庫、客車庫、東北の隅に『器械場』があり、南寄りに外国人官舎や役人官舎が建てられていました。当時はまだ、工場が停車場のすぐそばに配置され、独立した工場の体制とはなっていませんでした。『器械場』は、明治十五年頃、木工・挽立・仕上・旋盤等の各工場の機能を備えた総合職場に増改築されました。桁行一五〇フィート（四五・七メートル）、梁行二〇五フィート一〇・五インチ（六二・七五メートル）で梁間三〇フィート前後の小屋組七棟を並列して建てられていました。

図2　新橋停車場平面図　明治14年
『日本鉄道史　上篇』（大正10年刊）より

明治四十一年、鉄道庁を廃止し鉄道院管制が交付され、管理局五局が定められ、新橋工場は中部鉄道管理局に属しました。

新橋工場は、年々作業量が増大し敷地も手狭となったので、工場機能を東京府荏原郡大井町（現在、東京都品川区大井町）に移転することを決定し、明治四十三年建設に着手し大正四年八月、木挽職場以外は移転を完了しました。

総合職場の工場建物は、大正四年、桁行三〇〇フィート（九一・四四メートル）、梁間三〇フィート（九・一四四メートル）の二スパンの建物として大井に移築され、『用品倉庫』として使用されました。

大正七年、新橋工場大井派出所は、新設工場の完了と共に大井工場となり、新橋工場は、大井工場汐留派出所となりました。

昭和三十六年四月から着手された大井工場改良整備に伴い、昭和四十二年『用品倉庫』が解体され、博物館明治村に移築されることとなりました。移築工事は昭和四十三年五月に着手し、同年十月に完成しました。

明治村では、内部に明治の産業機械を展示し、建物の名称を『鉄道寮新橋工場・機械館』として昭和四十四年三月より公開しました。

建物の概説と評価

明治村に移築された『鉄道寮新橋工場・機械館』は、英国リバプール製の鉄柱を用いた鉄道開業当初の遺構であり、新橋工場の増改築及び大井工場の移築改造にあたっては、国産の鉄柱も後補されました。英国製の鉄柱は円形中空断面の鋳鉄製で、「HAMILTON'S WINDSOR IRONWORKS LIMITED LIVERPOOL」の陽刻がありますが、年代の明記はありません。明治五年当時、日本ではまだ鋳鉄柱の製造を行っていなかったので、英国製のものが使用されたものと思われます。国産のものは「明治十五年　東京銕道局鋳造」及び「鐵道作業局新橋工場製造　明治三十四年」と陽刻された二種のものが混用されています。

柱間隔は桁行、妻間とも外周一〇フィート（三・〇四八メートル）間隔に建てられ、英国製鋳鉄柱の全長は五六四〇ミリメートルで、柱頭のキャピタルはタスカンオーダー式となっています。下部のベース部分は外径一五インチ（三八一ミリメートル）の円形でアンカーボルトの穴が八ケ所開けられています。標準柱は、全長にわたり壁の鉄板を取り付けるための縦縁が鋳出されています。〈図3〉　標準柱のほかに隅柱などの役物やクレーンを取りつけるブラケット金物が付いている柱もあります。

国産の鋳鉄柱は英国製と同様の形式ですが、長さは英国製のものより短く明治十五年製のものが五一九〇ミリメートル、明治三十四年製が四九七〇ミリメートルとなっています。ベースは正方形でボルト穴が四ケ所です。〈図4〉　これら国産柱は、並列する切妻屋根の谷部分の中央列柱に一〇フィート（三・〇四八メートル）間隔に建てられています。

鉄道開業当初、工場作業はほとんど多くの外国人技術者に頼っていましたが、明治七年に一一九人だった外国人技術者も日本人の技術の向上によって年々減少し、明治十四年では、わずか八人になりました。鋳鉄柱等の資材も、輸入品に頼らず国産化の道を模索したのです。

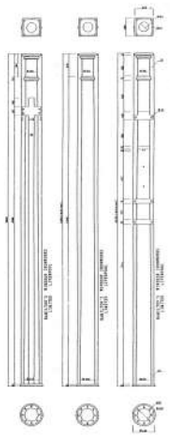


図3　英国・ハミルトン製鋳鉄柱

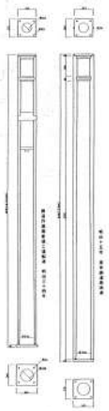


図4　国産鋳鉄柱

建物は、大井工場時スパン三〇フィート（九・一四四メートル）、桁行三〇〇フィート（九一・四四メートル）のキングポスト・トラスの小屋組を二組並列した形で構成されていましたが、明治村の移築に際しては、桁行一七〇フィート（五一・八一六メートル）としました。小屋組トラスの圧縮材はT形材及びL形材が使用され、引張材は丸鉄棒が使用されています。柱とトラスの接続は、鉄製プレートが使用されています。

この建物は、当初その意匠、主要な材料及び技法を鉄道発祥の国イギリスからイギリス人によって伝えられたもので、しかも最初期のものでした。石炭を焚く蒸気機関車時代のものとして当然に不燃質の鉄造建築があり、その後の増改築によってもその材料およびプレハブ的技法と、その帰結としての意匠も本質的には変わっていません。

明治村への移築に際しては、上記のような歴史的価値を尊重し、大井工場時コンクリート・ブロック造であった外壁を鉄板張りに改めるなど可能な限り新橋時代の姿に復しました。そのため、鉄による不燃構造建築のわが国最初期の遺例として、またその意匠、材料、技法においてもきわめて価値の高い交通運輸関係の近代化遺産ということができます。

2　鉄道局新橋工場

創立沿革

明治十年一月、工部省は鉄道寮を廃して鉄道局と改め、十局を置き、本局の下に新橋・神戸の両鉄道局が置かれ、新橋・神戸の工場業務は、それぞれ各鉄道局に属しました。

新橋停車場構内の作業は、器械場のほかに、鍛冶場・塗師場が建設されるなど、製造・組み立て・修繕等の作業が確立され、しだいに工場として独立され制度化されました。そして、明治十五年工場に名称がつけられ、旋盤・甲木工・乙木工・鍛冶・製罐・塗師・真鍮・鑢・鋳物の九工場が定められました。

明治十六年七月、新橋鉄道局に運輸・建築・汽車・会計・倉庫の五課が置かれ、新橋工場は汽車課に属しました。

明治十八年十二月、工部省が廃止され鉄道局は内閣所属となりました。明治十九年「鉄道局分課章程並通則」が定められ、新橋工場は新橋汽車課に、神戸工場は神戸汽車課に属することになりました。

新橋工場は、明治十九年、修繕工場、製罐工場、鍛冶工場等の建物が新築されました。その後も建物は年を追うごとに増え、大正二年の「新橋停車場平面図」〈図5〉を見ると、工場・倉庫のほか事務所・官舎を含め敷地全体を建物と線路で埋めつくしています。

明治村にある『鉄道局新橋工場』の創建は、明治二十二年頃新橋工場に建てられたものと思われます。また、建物の規模や、東京都埋蔵文化財センターにより行われている汐留発掘調査による『乙木工場』の基礎跡から判断してこの建物は、『乙木工場』の建物〈図6〉であった可能性が高いと考えられますが、断定するには至っておらず今後引き続き調査が必要です。

この建物は大正八年大井工場に移築され、種々の職場にあてられ昭和二十七年より『第二旋盤職場』の建物として使われていましたが、昭和三十六年四月から着手された大井工場改良整備工事に伴い、昭和四十一年解体され明治村に移築されました。

明治村では、内部に明治天皇御料車・昭憲皇太后御料車などを展示し、建物の名称を『鉄道局新橋工場』として同年十月より公開しました。

建物の概説と評価

『鉄道局新橋工場』は、鋳鉄柱を使った鉄構造の建物で、鋳鉄柱のキャピタルがタスカンオーダー式の中空円柱で、柱の側面に壁材を受ける縦縁が鋳出されており、柱の長さは四八九〇ミリメートル（約一六フィート）です。『鉄道寮新橋工場・機械館』のイギリス製鋳鉄柱と同様の形式をとってますが、鉄柱に「明治弐十二年　東京鋏道局鋳造」の陽刻があることから、国産であることは明らかです。ベースは正方形で四本のアンカーボルトで基礎に固定され、柱と小屋組は鉄製プレートを介して締結されています。出隅の柱は、縦縁が直角方向に取りつけられています。小屋組は鉄製キングポスト・トラスで圧縮材の合掌、方杖はT形材、引張材の真束、陸梁等は丸鉄棒を使用しています。

屋根は切妻屋根ですが、頂上部分に越し屋根が造られています。越し屋根部分にある明かり取りの窓のサッシュに「I.G.R.COBE 1889」と銘があり、鋳鉄柱の「明治弐十二年」の陽刻と一致します。

この建物は、明治村に移築されるまでに、一旦大井工場に移築され多少の改変がありました。大井工場時は、梁間が本屋部分三五フィート（一〇・六六八メートル）、下屋部分約一五フィート二インチ（四・六二メートル）、桁行柱間一〇フィート（三・〇四八メートル）、全長三〇〇フィート（九一・四四メートル）の平屋建でした。桁行三〇〇フィートのうち二〇〇フィート（六〇・九六メートル）が鉄構造で、残りの一〇〇フィート（三〇・四八メートル）は木造でした。

明治村では移築に際し、全長を一二〇フィート（三六・五八メートル）とし、当時の資料やほかの建物の事例を参照して改め、できるだけ新橋工場時の姿に近づけるよう努力しました。その結果全体の意匠及び陽刻のある鋳鉄柱をはじめ、小屋組材、鋳鉄製下見壁パネルなど当初の骨格となる部材および技術をほぼ維持することができました。そのため「鉄道局新橋工場」の遺構とすることができ、交通運輸関係の近代化遺産と称するに足り得るものと思われます。

図5　新橋停車場平面図　大正2年　『日本鉄道史　下篇』（大正10年刊）より

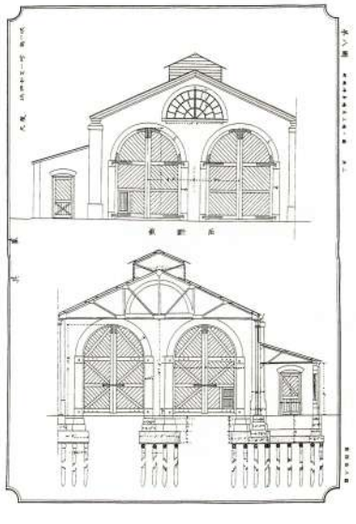


図6　新橋停車場木工場之図
『鉄道工事設計参考図面』
（明治31年）　所収

秋の明治村

10月・11月

開村三十周年　明治村菊花大会

正門正面に、五重の塔、千輪仕立て、懸崖で構成される総合花壇を出展する他、全日本菊花連盟会員をはじめ広く一般からの大菊盆養を中心とした出品物を展示します。

10月22日(日)～11月26日(日)
三重県庁舎前、清水医院横広場

＊都合により変更する場合がありますので詳細については事前にお問い合わせください。

呉服座秋季特別公演

明治初年に大阪府池田市に建てられた重要文化財の芝居小屋・呉服座での特別公演。昔ながらの枡席でご覧いただけます。

10月10日(祝)12時30分～、13時30分～
日本舞踊／名妓連
演目／長唄　鈴の舞
　小唄　わしが思い
　俗曲　からかさの　ほか

10月15日(日)12時30分～、13時30分～
むすめ歌舞伎／名古屋むすめ歌舞伎
演目／寿式三番叟

10月22日(日)12時30分～、13時30分～
村歌舞伎／串原歌舞伎保存会
演目／義士十二刻

10月29日(日)12時30分～、13時30分～
無声映画／女性活弁士　澤登翠

11月3日(祝)12時30分～、13時30分～
津軽三味線／加藤流三絃道藤秋会
演目／津軽じょんがら六段
　嘉瀬の奴踊り
　南部俵積み唄
　津軽あいや節　ほか

11月4日(土)、5日(日)
落語／三遊亭円皇

写真コンテスト入賞作品展

平成6年7月から平成7年6月までに明治村写真コンテストにご応募いただいた作品五八五点の中から選ばれた、明治村大賞二点、特選四点、入選十点、佳作二十点を展示。明治村ならではの四季折々の景観をとらえた情感あふれる優れた作品をご覧ください。

11月30日まで　三重県庁舎一階

明治村大賞　鈴木徹哉

明治村大賞　藤吉輝雄

聖ザビエル天主堂 オータムコンサート

明治二十三年(一八九〇)京都に建てられた聖ザビエル天主堂はステンドグラスの美しさで知られています。教会という絶好の音響空間を生かしたコンサートには定評があります。

11月3日(祝)　14時～、15時～
夏目久子(声楽)
黒人霊歌より「あなたはそこにいたのか」
サウンド・オブ・ミュージックより
「Climb Every Mountain」　ほか

11月5日(日)　14時～、15時～
ヴィクトリア室内合唱団(声楽)
ヴィクトリア作曲「ラメンテーション」
「アヴェ マリア」　ほか

11月12日(日)　14時～、15時～
真平純子(声楽)
山田耕筰作曲「赤とんぼ」「夕焼け雲」　ほか

11月19日(日)　14時～、15時～
名古屋ゴールデンエイジメイルクワイア(声楽)
シューベルト作曲「ドイツミサ曲」　ほか

11月23日(祝)　14時～、15時～
角田育代(ヴァイオリン)、石原明子(ピアノ)
ヘンデル作曲「ソナタ」　ほか

秋祭り

おみこしが練り歩き、屋台が軒を連ねます。ほかにも、大道芸、和太鼓、岩倉山車からくり人形とお囃子、古道具市など、村祭りの雰囲気がいっぱいです。

11月3日(祝)～11月5日(日)

建物内部特別公開

普段は見られない建物の中をご覧いただけます。

10月の土・日・祝日　10時～15時
森鷗外・夏目漱石住宅

11月の土・日・祝日　10時～15時
西園寺公望別邸「坐漁荘」

森鷗外・夏目漱石住宅

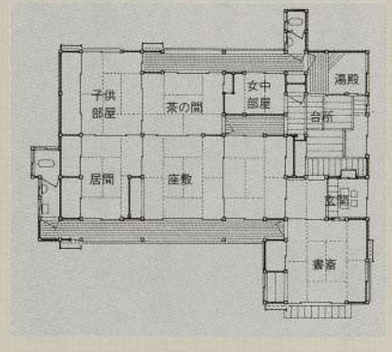
沙羅の花
「我猫庵」の刻とまる
(前田 茂 作)

この建物は明治二十年頃、東京の千駄木に医学士中島襄吉の新居として建てられ、その後明治二十七年秋に、漱石の学友で歴史学者の斎藤阿具の父が、阿具のために中島家から買い取りました。

明治・大正期の代表的文豪である森鷗外と夏目漱石が前後してこの家を住居とし、ここでいくつかの名作を生みだしました。ことに「猫の家」として有名であり、東京都旧跡に指定されていました。

森鷗外は明治二十三年九月から同二十五年一月までこの家に住み、雑誌「しがらみ草紙」の編集刊行、小説「文づかひ」の執筆などをしました。

夏目漱石は一高と東大の英語・英文学の教師であった明治三十六年三月から同三十九年十二月までこの家に住み、「吾輩は猫である」「倫敦塔」「坊っちゃん」「草枕」といった名作をつぎつぎに生みだしていきました。特に彼の初めての小説として発表された「吾輩は猫である」は、まさにこの建物を主要な舞台としており、その描写はきわめて正確です。

明治中期の中流階級の典型的な和風住宅であるこの建物は、建坪三十九坪の木造平屋建瓦葺で、のちに中廊下形式の住宅ができる以前の典型的なプランを持っています。

各部屋は二列に連続して並べられ、近世以来の書院造りに近い構成をとっていますが、玄関の脇には書斎ないし応接間ともいうべき八畳の部屋が独立して設けられているのは、新しく生みだされた傾向といえます。後にはこの部屋を唯一の洋間にする家も多くなっていきました。それ以外の部屋は単に襖によって仕切られているに過ぎず、わずかにお手伝いさんの部屋(三畳)だけが狭いながらも独立性を保っています。家族を一体的なものとし、社会の最小単位を個人ではなく「家」と考える日本的な観点が、この住宅の構成に典型的に現れているといってもいいでしょう。ただしプライバシーの確保がほとんどない点が問題ではあります。